

佐野史郎氏特別講演記録「乱歩と戦争」

佐野史郎／細井尚子／金子明雄（司会）

【登壇者】

佐野 史郎（俳優）

細井 尚子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）

授）

金子 明雄（立教大学文学部教授、江戸川乱歩記念大衆文化研究センター長）

二〇一九年六月七日、江戸川乱歩作品にも多く出演されている佐野史郎氏¹を迎え、「乱歩と戦争」と題した講演会を行いました。当日はあいにくの雨でしたが、多くの方にご来場いただきました。本学異文化コミュニケーション学部の細井尚子教授が聞き役を務め、俳優であり、乱歩ファンでもある佐野氏ならではの発想に富む講演の様子を、活字にてお伝えいたします。

【開催概要】

《日時》 二〇一九年六月七日（金）十七時半～十九時

《会場》 立教大学池袋八号館八一〇一教室

《主催》 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

私と乱歩

金子…皆さん、こんにちは。本日は足元のお悪い中、お集まりいただき、ありがとうございます。立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターでは、活動の社会還元として年に一度、公開講演会を開催しております。本日は俳優の

佐野史郎さんをお招きして、「乱歩と戦争」というタイトルでお話をしていただきます。聞き役は、本学の細井尚子先生です。それではよろしく願います。

佐野…よろしく願います。「乱歩と戦争」などという大上段に構えたような、大変なタイトルをつけてしまつて、かなりドキドキしています。

細井…私は専門が演劇学でございますが、乱歩については、この会場で一番無知かと思いますが、初心者、入門者の視点から色々とおうかがいしたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

佐野…大学やシンポジウムなどでの講演はこれまでも行つてはおりますが、俳優の性なのか、会話ではなく一方的に語っていると不安になるんですね。ちゃんと伝わっているかなつて。今回は細井先生とお話ししながらなので安心です。

実は僕は、乱歩原作の出演作品が色々あるんです。最初は、平成四（一九九二）年の「ずっとあなたが好きだった」（TBS）というドラマがきっかけでした。そこで演じた冬彦という「マザコン男」が、社会現象になりました（笑）。最終回は三〇％以上の驚異的な視聴率で、調子に乗った訳ではないのですが、子供の時から幻想文学とか怪談とかが

好きだったので、冗談交じりに「ちょっとラヴクラフトやりたいんですけど」と企画を提案したんです。彼が生み出した「クトゥルー神話」という邪神世界が好きで、ラヴクラフト原作の「インスマスを覆う影」のドラマ化が実現したんです。あ、ラヴクラフトも乱歩がいち早く紹介しているんですよ。（ギミア・ぶれいく インスマスを覆う影）TBS 平成四（一九九二）年。半魚人みたいなホラー作品です。視聴率も十五％以上獲り、手応えを感じました。平成五（一九九三）年もドラマ「誰にも言えない」（TBS）で、冬彦の続編のような山田麻利夫という当時はまだ浸透していなかった言葉でしたが「ストーリーカー」が登場して大ヒットしたのですが、その二作品のプロデューサーである貴島誠一郎さんから、今度は乱歩をやりませんかというお話しをいただいたんです。

それが「断崖」などが入っているオムニバスドラマ「乱歩―妖しき女たち」（TBS 平成七（一九九四）年）です。当時は「虫」も候補に入っていました。ドラマでは猟奇的過ぎたのかさすがに外されました。代わりにとて「映像向きだ」と思っていた鏡のトリックの「接吻」を、デビューして間もない常盤貴子さんと共演させていただきました。小品ですが非常に満足のいく作品で、今でも好き

だと言って下さるファンの方がいらっしやいます。時代が変わっても乱歩作品というのは、人の心をつかんで離さずに古くならないんだなあと確信を持ちました。子供の頃からのファンとしては非常に嬉しく思います。

乱歩作品との出会いは、五十五年くらい前にポプラ社の「少年探偵団」シリーズ（昭和三十九（一九六四）年、昭和四十八（一九七三）年）が刊行され始めた時で、『電人M』を父親に買ってもらって読んだのが最初です。電人Mはロボットですが、実は風船だったというトリックで、金属がゴムになるという、フェティッシュで変態心をくすぐる作品なんです。そのシリーズが刊行された年は東京オリオンピクがあって、乱歩が七十歳で亡くなる前の年でした。僕はたぶん昭和三十九年の九月に買ってもらったと思うんですけども。七月に『青銅の魔人』と『妖怪博士』、八月に『怪人二十面相』『少年探偵団』『大金塊』『怪奇四十面相』、九月に『地底の魔術王』、そして『電人M』。十月に『宇宙怪人』『奇面城の秘密』『サーカスの怪人』『搭上の奇術師』が刊行されました。もちろん四ヶ月くらいで、これだけの多作を一度に書ける訳がなくて、かつて刊行、あるいは連載されていたものをまとめた作品だったわけですけども、まさか戦前からのシリーズだったとは、ずっと知

らずにいました。

少年探偵団シリーズと戦争

佐野・最初に書かれたのは、昭和十一（一九三六）年ですね。雑誌『少年倶楽部』に「怪人二十面相」が連載され始めます。「怪人二十面相」は明智小五郎対二十面相という、シリーズの主役二人が登場する作品です。僕はこれが後で戦前に書かれたものだとして知って、びっくりしました。昭和十一年というと、二・二六事件があった年ですよ。強引ではありますがありますが、二・二六事件と「少年探偵団」が重なるような気がするんです。

そのことを解説に書いたことがありますので、ここでもちよつと読んでみようかなと思います。

少年探偵団シリーズ第一作目『怪人二十面相』の連載が始まったのは昭和十一年（一九三六）、「少年倶楽部」一月号から。まもなく二・二六事件が起きる。政治腐敗を嘆いた陸軍青年将校らは国家に対する不信から天皇に昭和維新を仰いだがるが、果たされることなく反乱軍として処せられた。岡田啓介内閣総辞職、広田弘

毅内閣が組閣され思想犯保護観察法が成立。

そんな時勢での少年探偵団の結成と青年将校らの行いを同じ組上に載せるのは甚だ強引ではあるが、警察官ではなく、いち私立探偵ながら、次々と事件を解決する明智小五郎の姿に憧れる小林少年を始めとする子供達は、国家を憂いて天皇を信奉する青年将校達と確かに同じ時代の空気の中にいた。

警察をよそに活躍する少年達は、けれど決して処せられることはない。お人好しの中村捜査係長もまた、明智に全幅の信頼を寄せている。社会的にも一目置かれた明智は警察組織と連携し、事件を落着させて行く。

政府に楯ついた青年将校達は陸軍のエリート。少年探偵団のメンバーも良家の子供達だ。けれど片や処せられ、片や守られる。この差異に乱歩の心の奥底の眼差しを探る手がかりはないか？

「うつし世は夢、夜の夢こそまこと」

乱歩の座右の銘が、この時世において、ひととき憂いと嘆きをにじませる。

少年探偵団シリーズは昭和十年（一九三五）の夏に企画が持ち上がったという。

佐野…そうなんです。一・二六事件の前の年なんですよ。

世は昭和六年（一九三一）の満州事変を機に満州国を制した関東軍の勢いを得て一気に軍事色が強まり、エログロ、猟奇的な作風で人気を博していた乱歩に対し、反社会的とする風潮が高まっていたことは察せられる。ならば健全な青少年の姿を描くことでそのイメージを払拭しようという出版社の意図も読み取れる。乱歩自身も子供向けの小説を書くことで、そこに押し込められたエロスを隠す喜びを得ていたこともあるだろう。

だが、それもながくは続かなかった。

昭和十四年（一九三九）、四肢が切断された傷痍軍人の性愛が描かれた『芋虫』の発禁。

乱歩にとつては軍事政権に対する批判的なメッセージなどではなく、人間の本质を問う表現の一つに過ぎなかったであろうが、結局、この年を機に、少年探偵団シリーズの筆も置くことになる。

乱歩は、コナン・ドイルが生んだ探偵シャーロック・ホームズと助手のワトソンを明智小五郎と小林少

年に、モリス・ルブランの怪盗アルセーヌ・ルパンを怪人二十面相になぞらえたことは周知。当初から少年探偵団の構想があったとしても、第一作目の『怪人二十面相』を書きながら二・二六事件を知った時、青年将校達に対する想いはどのようなものだったか？

明智小五郎が登場したのは大正十四年（一九二五）の『D坂の殺人事件』。ここではまだのんびりとした空気が漂っている。そして小林少年が登場した昭和五年（一九三〇）『吸血鬼』、満州事変勃発の前年である。そうした時局の中で、少年向けに二人のコンビが世に出された昭和十一年（一九三六）『怪人二十面相』。そこから毎年新作が連載され、単行本化された。昭和十二年（一九三七）に『少年探偵団』。この年、盧溝橋事件が起こり日本軍と中国国民革命軍が衝突、支那事変、日中戦争へと突入した。昭和十三年（一九三八）『妖怪博士』、昭和十四（一九三九）『大金塊』。

二十面相は『妖怪博士』において奥多摩の鍾乳洞で明智に敗れ、『大金塊』には登場せず、代りにロシアのルパシカを身にまとった黒覆面の女盗賊が明智や少年探偵団と戦う。

検閲による圧力があったか？

敗れたとはいえ、富豪らの美術品を奪い、国家警察を翻弄し、鼻であしらい、自由にその姿を変える二十面相の存在は、軍の政権にとって疎ましい思想として映ったことは想像できる。何より二十面相は、先ずこう語られている。

「宝石だとか、美術品だとか、美しくて珍しくて、非常に高価な品物を盗むばかりで、現金にはあまり興味を持たないようですし、それに、人を傷つけたら殺したりする、残酷な振舞は、一度もしたことがありません。血が嫌いなのです。」

政財界にはびこっていた賄賂や汚職、戦地での殺戮が正義としてまかり通る価値観、世の中に対し、二十面相の存在は、乱歩がどのように思おうと、確かに戦争国家に対する正面からの批判だ。

そして昭和十六年（一九四一）、東条英機内閣、大東亜戦争宣戦布告。

『大金塊』に登場しなかった二十面相はもとより、『少年倶楽部』以外に連載されていた明智小五郎のもの、昭和十四年（一九三九）の『地獄の道化師』を最後に姿を消した。

次に登場したのは十年を経た戦後、昭和二十四年

(一九四九)『青銅の魔人』である。

明智は二十面相との再会を喜ぶかのようだ。

「さすがに戦争中は悪事をはたらかなかつたようだが、戦争がすむと、またしても昔のくせを出したね。」

戦時中、明智が陸軍中野学校で重用されていたと想像するに難くないが、果たしてどうだったか？ 二十面相ならば脱獄した後、戦争など我関せずと収集した美術品を当局に知られることなく地下で愛でていたと信じたのが、『怪人二十面相』で二十面相の狙ったダイヤモンドが帝政ロシア時代の宝冠を飾っていたものだったことや、『大金塊』の、二十面相と関わりがあったに違いない女盗賊の装束もロシア風だったことを合わせて考えるとロシアのスパイであったか？

二十面相も、明智も、小林少年もとにかく変装し、すり代る。読者は目の前のものがそうではないかもしれないと身構える。

『怪人二十面相』では明智と瓜二つの男が明智として二十面相に捕らえられ、明智は明智に恨みを持つ赤井寅三として二十面相の館に侵入し、事件を解決する。

だが、あの瓜二つの男こそ二十面相ではなかったか？ そして明智を誘い出した二十面相の手下の……いや、おそらくは愛人であろう美しい女こそ、明智の文代夫人の変装した姿ではなかったか？ 『大金塊』の女盗賊もまた、文代夫人ではなかったか？ 全ては明智の変質的な性愛のなせる技か？

二十面相の劇場型犯罪は、ほとんどイリュージョン・マジックだ。だとしたら、二十面相の存在自体もまた明智自身が仕掛けた自作自演のマジックである可能性は大いにありうる。

『青銅の魔人』は焼け野原や浮浪児など、戦後の空気をいっぱいに孕んでいる。その中で戦災孤児のチンピラ別働隊が大活躍するが、小林少年は良家の子弟により結成された少年探偵団には加入させず、釘をさす。

「君たちみたいなのをなかまに入れたら、ほかの団員がおこるからね。」

一方で、戦災孤児ゆえ、彼らが生きるために盗みなどをせざるを得なかったことも受け止め、社会に適應させた。

国家や社会のモラルに寄り添い、悪を懲らしめる少年探偵団の物語は、世に正しく、美しく、価値のある

ことが、実は逆さまなのではないのかと読者に問い返す。

（佐野史郎「解説」『怪人二十面相・青銅の魔人』岩波書店 平成二十九（二〇一七）年）

佐野…少年探偵団が繰り返し読まれ、世代を超えて語られ続ける訳ですよ。信じていたものがそうではなかったというのを、乱歩は最初から織り込んで書いていたんでしょうか。小説の連載を中断してしまうこともあったので、行き当たりばったりと半分半分かな。でも、構成通りに書いたものよりも、閃きに導かれたような作品の方が、僕にとっては魅力的だった気がします。本当のところは、どっちがどっちか分からないんですけれども。細井先生、どうですかね？

細井…どうですかね……。ともかくも佐野さんは「少年探偵団」が入り口で、そこからお入りになったと。

佐野…はい。

乱歩の戦争意識

細井…今、戦前戦中のことを少しお話しくださいました

が、当時、一般の人々が戦時中だと実感していた期間は案外短くて、昭和十三（一九三八）年以降だったということ聞いています。乱歩の作品にはもっと早くから、不穏な空気が漂っているように思いますが。「芋虫」は結構早い作品ですよ？

佐野…昭和四（一九二九）年ですね。若松孝二監督⁴の「キヤタピラー」（平成二十二（二〇一〇）年）という作品は、「芋虫」が原作だと監督がおっしゃってました。著作権を払うのを渋って題名を変えたようです（笑）。その中で篠原勝之さんが演じている「馬鹿の振りをした男」が、戦争に行かずに済んでいて、終戦と同時に正常に戻るシーンが印象的でした。けれども、昨年放送されたドキュメンタリー番組で、精神的に障害がある人たちも戦地に送られていたということが分かりました（「隠されたトラウマ」精神障害兵士8000人の記録）。NHK 平成三十（二〇一八）年。もちろん「芋虫」が発表されていた頃は、そんなことは知る由もないですよ？

細井…今回のテーマは「乱歩と戦争」ですが、日常の中に戦争と相通じるような不穏な雰囲気、乱歩は既に感じていたんでしょうか。

佐野…そうですね。特に「D坂の殺人事件」（『新青年』大

正十三（一九二四）年新年増刊号）では、明智小五郎はまだ素人探偵ですからのんきなものです。それが活躍し始めるようになってくるのは、なぜか満州事変を挟んだ頃です。シンクロするように、乱歩の執筆量が急になくなっていくんですよ。ちよつと気になるところです。

『新青年』の昭和四年一月号に発表した「芋虫」が、後に発禁になった時、乱歩は戦争反対とか軍部を批判したのではないと言っています。

いわゆる私の初期の短篇の代表的なものの一つである。これは雑誌「改造」にたのまれて書いたものだが、内容がエロな上に、その頃タブーとなっていた金鵄勲章を軽蔑したような文章があったので、いくら伏せ字を多くしても、当時その筋から睨まれていた「改造」にはとてもせられないというので返されたのを「新青年」に廻したのである。「新青年」は娯楽雑誌だから、それほど神経質にならなくてもよかったのである。でも、実はこういうわけで「改造」にのらないのだと伝えると、「新青年」も恐れをなして、伏せ字だらけにして発表したものである。「新青年」に発表の際は、編集者の希望で題名を「悪夢」と改めた。

この小説が発表されると、左翼方面から称讃の手紙が幾通もきた。反戦小説としてなかなか効果的だ。今後もああいうイデオロギーのあるものを書けというのである。しかし私はこの小説を左翼イデオロギーで書いたわけではない。この作は極端な苦痛と、快樂と、惨劇とを書こうとしたもので、人間にひそむ獸性のみにくさと、怖さと、物のあわれともいふべきものが主題であった。反戦的な事件を取り入れたのは、偶然それが最もこの悲惨を語るのに好都合な材料だったからにすぎない。

太平洋戦争にはいる直前に、私の多くの作は一部削除を命じられたが、全文発売禁止となったのはこの「芋虫」だけであった。左翼に気に入られたものが、右翼にきらわれるのは至極もつともな話で、私は左翼に認められたときも喜ばなかったように、右翼にきらわれたときも別に無理とは思わなかった。夢を語る私の性格は、現実世界からどんな取り扱いを受けようとも、一向痛痒を感じないのである。

（初出 江戸川乱歩「あとがき」『江戸川乱歩全集』桃源社 昭和三十七（一九六二）年、所収「自作解説」『江戸川乱歩全集』第三巻 光文社 平成十七（二〇〇

五〇年

佐野…そんなつもりじゃなかったというのは、嘘じゃないと思いますが、本心だったんでしょか……。軍部が政局を動かしていく流れに対して、自分の夢のような時間を抑

えつけられて、反発する気持ちはあったと思います。かといって、そういう政治の流れを潰すために、俺は筆を取って運動するぞ、という人でないこともわかるんです。両方が乱歩の中に混在しているというのが、魅力なのかもしれません。一番大切なことは自分の生活ができ、夢を見続けることのできる世の中であって、政局に支持される小説を書くことではない、かといってそのために政局を批判しようというわけでもない。そんなことをしたところで夢を見れる訳ではない……という非常に強い乱歩の意志を感じます。

細井…乱歩の作品は、まず日本的な習慣や感覚から疎外されていきますよね。その上で、戦争という社会状況に抑圧されていくので、自作に「戦争」を用いていても、反戦の作品ではないと言ってしまう。

佐野…そうですね。だから少年探偵団シリーズを書き始めて、検閲が激しくなった時に一番困るのは出版社ですよ

ね。だって乱歩の作品はとにかく売れるわけだから。で、昭和十（一九三五）年の夏だったかに、少年物の執筆を依頼するわけですよ。当初、乱歩にはそういう発想がなかったようですが、それ面白いかな、と思いついて翌年、シリーズを書き始めています。

現実世界とは距離を置くと言う乱歩ですが、その頃の社会は貧富の差が激しくなっていて、それを是正するべく軍人などが立ち上がった血盟団事件や五・一五事件が起り、昭和十一（一九三六）年、少年探偵団シリーズが始まった年に、奇しくも二・二六事件が起きています。強引かも知れませんが、一月から連載が始まって二月に起きたこの事件のことを考えないわけはないなと思うんですよ。偶然かもしれませんが、ちょうどその頃に小林少年が団員を集めています。検閲の存在も大きいでしょうけれど、乱歩は時代にとっても敏感だったように思います。少年たちにとせば、今の世の中に対する、政治に対する不満を代弁しても、そうは抑圧されない。

もう一つ、個人的には「死のう団事件」との関連も気になっていきます。軍部と日蓮宗との癒着に憤った江川桜堂が、昭和二（一九二七）年に創立した日蓮会を母体としていますが、黒装束で白い羽織着て袴履いて、「死のう」と言

いながらデモ行進する「死のう団」、日蓮会殉教集青年党という団体となって世間を騒がします。「死のう、死のう」って言って。昭和十二（一九三七）年には、国会に押しかけていって本当に割腹自殺を試みます。

そんなことが続く中で、少年探偵団ならば、あるいは二十面相ならば、流血や現金は嫌いだと日中戦争に突入してゐる頃でも堂々と言えるっていう思惑があったんじゃないかな、と思います。

細井…そうですね。当時の少年はすぐ兵士になるので、お国のために第一に、一体感を作らなくてはいけない。そこに全然違う価値観を持つてくるのはかなり異質だったんじゃないかと思えます。

佐野…国家総動員法、昭和十三（一九三八）年からでしたっけ。

細井…そう。だからこんなときに少年物って発想も凄いです。

佐野…血を憎んで人を殺さず、現金には興味がない二十面相が「大金塊」に登場しないわけですよ。それは自主規制じゃないかと。

細井…忬度……。

佐野…恐らく。でも随所にロシアのルパシカ⁵風の衣装を

着ている女盗賊とかが登場して、当時の社会状況を表している。ロシアが日本と敵対する連合軍に加担するのは、昭和二十（一九四五）年ギリギリですが、なんとなくロシアのスパイなんじゃないかと。少年たちに戦時中故のメッセージを届けているような気がします。

細井…私たちが今読んで感じる内容とは、全然違うのかもかもしれませんね。

佐野…その少年探偵団シリーズでさえ、全面発禁となりました。

細井…よっぽど恐れていますよね。乱歩の影響を。

佐野…乱歩は結局書かなくなつて、代わりに『貼雑年譜』という、自分の生い立ちを綴つた年譜を作るんですね。昔、精巧なレプリカ⁶が作られたんですけど、中々これは見られないなと思つて、買っちゃいました。宝物ですよ。

細井…清水から飛び降りて（笑）

佐野…本当にすごいですよ。何日に引越して、引越したときのチラシみたいなものとか。自分の歴史を四年間で、立派なアルバムに仕立てるんですよ。昭和二十（一九四五）年三月に東京大空襲があつた時も、この辺りでは乱歩邸だけが残つたそうですね。蔵も母屋も。乱歩的な読み方をすると、アメリカに日本人のスパイか乱歩ファンが

いて、B 29の乗組員に「あそこだけは避ける」って言う……。

細井…すごい高度なテクニクですね（笑）

佐野…乱歩は十年後に戦中のことを書いていますね。自身については、ほとんど書いていませんが、何編か戦争にまつわる作品があります。その中に「防空壕」という短編があるんですよ。ラストが衝撃的です。

佐野…戦中空襲が激しくなって、防空壕の中に逃げ込んだら、それはもう得も言えぬ美女が一人いた、もんぺ姿で。外はもう物凄い空爆。でも若い女性と二人つきり。後は分かりますよね。それが忘れられないって、その主人公は空襲が終わった後も、その女を求めてさまよい歩くストーカーになるわけですよ。

薪でさえそうだから、一軒の家が燃え立てば美しいにきまつている。一つの市街全体が燃えれば、もっと美しいだろう。国土全体が灰塵に帰するほどの大火焰ともなれば、更らに更らに美しいだろう。ここではもう死と壊滅につながる超絶的な美しさだ。僕は嘘を云っているのではない。こういう感じ方は、誰の心にもあることだよ。（中略）最も僕をワクワクさせたのは、新

らしい武器の驚異だった。敵の武器だから、いまましくはあつたけれど、やはり驚異に違いなかった（中略）B 29が飛行雲を湧かしながら、まっ青に晴れわたった遙かの空を、まるで澄んだ池の中の目高のように、可愛らしく飛んで行く姿は、敵ながら美しかった。（江戸川乱歩「防空壕」初出『文芸』昭和三〇（一九五五）年、所収『十字路』光文社 平成十六（二〇〇四）年）

佐野…こんな風にですね。空襲の時B 29が飛んできて、恐ろしいというよりも綺麗だと思っていたそうです。その感覚は多分本当なんじゃないかなと思います。

細井…そうですね。私たちは物を見る時に、自分の立場や置かれている環境などから離れられないものですから、もしそういうものから全く自由になってみたら、そうかもしない。

佐野…「本当のことを言う」と弁解しながらですね。戦争の最中に「わあ綺麗」とは言えない。

細井…そう感じた自分に罪悪感を持つといえますか、十年経つてようやく書けたということですね。「戦意高揚小説」はあるのでしょうか？

佐野…「偉大なる夢」(『日の出』昭和十八(一九四三)年十一月号〜翌年十二月号)というスパイの話です。日本に天才博士がいて、日本とアメリカの間を五時間ぐらいで結ぶ超高速の飛行機を編み出して……。

細井…速い!

佐野…その秘密を知られないように、長野のどこの別荘に閉じ籠もっているのですが、誰かがスパイじゃないかっていう疑心暗鬼に囚われるわけです。登場人物が十数人しかいませんが、あれを舞台上で上演したら面白いなと思います。どんでん返しがあつて、よくできた作品なんです。

アメリカのルーズベルト大統領も出てきて、日本が怖くてしょうがない、ということを書かせるんですよ。日本人は追いつめられると何をするか分からないから、侮ってはいけないう。そうやって読者を鼓舞していたのでしょうから紛れもなく「戦意高揚小説」です。

その中で、スパイだと疑われる人物が出てきますが、これがマッドサイエンティストで。敵が魚雷を打ってきて、強力な磁石で吸い付けちゃう(笑)。そういう荒唐無稽な技術をたくさん挙げながら、大真面目に日本は凄いつていう「戦意高揚小説」なんです。なんかバカにしている感じがしなくもないんですが(笑)。結論はネタバレになるの

で言いませんが、スパイは意外な人物なのです。その人は異国の血が混じっていて、なんとペリー来航の頃まで遡る記述があるんです。幕末に来日したアメリカの商人が日本人と結婚して、その子供がスパイとしての教育を代々受けている、という設定なんですよ。最後はそのスパイ教育を受けていた人々も改心するという話ですが、それは発禁にはならないですよ。素晴らしい発明をいっぱいするし、たぶん軍部も大喜びですよ。

細井…なんか残念な……。戦争はこんなレベルだよって言っているのがよくわかります。

佐野…でも、このレベルが戦時中には受け入れられていたんですよ。なんだかなあ、と読む前には思っていたんですが、乱歩的なまなざしというのを考えると、堂々と軍部が喜ぶ小説を書きながら、実はそのスパイが、軍で一番偉い「望月」という人物その人だったという一行を、心の中で唱えてたんじゃないかな、と思っっています。それが作品に書かれていたらもう全部アウトなんだけれど。

例えば、明智が二十面相で、仏像が小林少年だったというような意外なキャラクター性を乱歩はたくさん書いてるので、「偉大なる夢」を読んだ時に、「ああ、確信犯だな」と思いました。自分の夢を壊すような人は許さないって

う思いは秘めていたんじゃないかな。だめですかね。

細井…いい全然。

佐野…昔から僕は、シナリオを読む時に「表面上はそう書かれてはいないけれど、本当は正反対の意味でセリフを言っているんじゃないのかな」と思うことがあって、監督の演出意図と合わずにぶつかる時もあります。どんなに尊敬する演出家に「全然違う！」と言われても、一度そういう風に読めてしまったら譲れない。そんな時は納得がいくまで話し合います。結果、自分の読み方が違っていたとしても、そこで交わされる感覚のやりとりは、必ず作品に生きてくると思います。僕の師匠の唐（十郎）さんは、自分でセリフを書いていながら、「これはどういう意味だ？」と本気で戯曲の内容を分析し直すことがよくありました。描かれた世界が、自分の手を離れて既に存在しているんです。唐さんが慕っていた若松孝二監督にも「台本に書いてあることを信じるな！」とよく言われました。目の前にあるものだけが事実なのだ。あれこれ考えた自分の演技プランなどより、目の前にあるものや人そのものに、ただ素直に語りかけろと。

乱歩の文章は語りかけです。物語を読んでいて、「さて、読者の皆さんはどう思いますか」と振られても困るのです

が、つい答えてしまいます。乱歩はもう亡くなっているので答えてはくれないけれど、想像することで会話をしているような気分にはさせられます。仏像の前で手を合わせている時のように、亡き人と会話をするというのはこういうことか、と思います。

ゴジラへの影響力

佐野…「偉大なる夢」にマッドサイエンティスト五十嵐東三博士の実験室が出てきます。とある地下に造られた部屋で、ピーカーやフラスコなど細かく描写されていますが、それがゴジラの一作目の芹沢博士の実験室にそっくりなんですよ。

思い込みかもしれませんが、でも考えてください。ゴジラの原作者は香山滋³ですよ。乱歩が選考委員だった『寶石』の第一回当選探偵小説「オラン・ペンデクの復讐」の作者ですよ。その香山滋が「偉大なる夢」を読んでいないわけがない！乱歩も香山滋の主演は全部あるって話してましたし、ゴジラの中にも乱歩が生きているんです。

香山滋は「怪龍島」〔初出『探偵少年』昭和二十三（一九四八）年六月号—十二月号、『少年世界』昭和二十四（一九

四九）年一月号—七月号）という小説を、愛文社から昭和二十八（一九五三）年に出しています。南の島に恐龍がいるという内容です。この主人公の少年の名前がまた、ドラマ「誰にも言えない」と同じヤマダマリオ！（笑）そして、翌年三月にマグロ漁船第五福竜丸の乗組員が、ビキニ環礁

沖のアメリカ水爆実験の被曝犠牲者となってしまったのをきっかけに、昭和二十九（一九五四）年十一月に香山滋原作の映画「ゴジラ」が公開されます。ゴジラだけ切り取ると、核実験で生まれた怪獣という印象が強いです。香山滋を見つけた出した乱歩先生がいなければゴジラは無かったということ。もし香山滋が当選せず、小説家デビューもしていなかったら、生まれなかった怪獣です。

目に見えるものや皆が信じていたものが、そうではないという発見に救われるというのは、子供の頃からよくありました。学校の授業などでも。乱歩作品は、それが一番の魅力かなと思います。

細井・佐野さんのお話をうかがっていると、乱歩は「戦意高揚小説」にして見ただけで、マルがもらえるように加工はしたけれども、芯は変えていなかったということを感じます。

佐野・だからどんな時代になろうとも、そのままざしさえ

持っていれば本当に大切なものを失うことはないと思います。その代わり、作品を生み出す時のエネルギーや苦しみは、常に変容し続けるので僕らには想像もできないですけれども。

乱歩の人生と戦争

佐野・乱歩に限らず、僕は人の生まれ育った背景に惹かれます。乱歩は紀州、三重県津市が本籍ですね。日清戦争が始まった明治二十七（一八九四）年に生まれています。明治二十三（一七九〇）年に大日本国憲法が施行されて、明治新政府が描く日本国の物語が浸透し始めていった頃です。十歳の明治三十一（一八九八）年にはもう日露戦争です。

すよ。
細井・ずっと戦争の中ですね。

佐野・幼少期はね。ただこれは連戦連勝の高揚した雰囲気だったことでしょう。少年たちはおそらく、「日本勝った、万歳！」とか言っていたんでしょうね。僕が子供の頃、昭和三〇年代の頃でも、クロパトキン¹⁰が歌詞に入った、戦争に強い日本を讃える戯れ歌をまだ歌っていました！

江戸川乱歩の出身地の三重。僕が好きなクレイジー

キャッツの植木等さん¹²も幼少期は僧侶の父親と共に伊勢で過ごしていますよね。子供の時、ゴジラとクレイジーキャッツで育ちました。映画でとても大きな影響を受けた小津安二郎監督¹³も三重県松阪市で育っています。僕がこよなく好きな人たちが、皆この辺出身なんです。何か訳があるような気がしてしょうがありません。育った土壌の背景というか。僕は出雲の地で育ちましたが、園山俊二さん¹⁴がいる。水木しげるさん¹⁵がいる。小泉八雲¹⁶が古事記を読んで訪れ、外国人として初めて出雲大社に昇殿したとか。

乱歩と縁の紀州だと、新宮^{しんぐう}が気になりますね。「孤島の鬼」〔『朝日』昭和四（一九二九）年一月号―翌二月号）にもラストに重要な土地として登場します。おそらく串本漁港から渡って、紀伊大島は大きすぎる気もしますが、あの辺りの話です。「孤島の鬼」は最後に主人公の葦浦に恋をする男（諸戸道雄）の出身地が新宮だった、とされています。ネタバレ許してくださいね。シャム双生児と思われていた男女が引き離されて、非常に美しい娘の秀ちゃんがいかな東京弁をしやべってよかったなんて言って終わっています。

乱歩は亡くなった後に瑞宝章を追贈されています。全作

品が国から発禁になった作家がですよ。一方、大逆事件（幸徳事件）で、大石誠之助という新宮出身の医者が明治天皇暗殺計画に加担したという冤罪で処刑されています。現在に至るまで国からの謝罪はありませんが、平成三十（二〇一八）年に新宮市がその大石氏を名誉市民に認定しています。新宮ってすごいですよね？

細井…確かに。

佐野…「孤島の鬼」の主人公、まあBL（ボーイズラブ）みたいな話ですから、切ない男の人の出身地が、そんな新宮で締めくくられていることが引っかけかかります。「偉大なる夢と「孤島の鬼」を続けて読むとくらくらします。「同じ話の、表裏一体か」というような。そこに、乱歩がこの国をどういう風に捉えていたのかという暗号が、まだ隠されているような気がして仕方がありません。

細井…乱歩は三歳くらいで名古屋に移っているので、家庭内で紀州の色々な文化や空気を吸いながら育ってきたということですね。

佐野…そうですね。家族は妹が亡くなったりはしたけれども基本的には幸せで、親とも兄弟とも仲が良くて。兄弟で三人書房という古本屋まで共同経営していました。後に乱歩は下宿屋を営みましたが、「D坂の殺人事件」には古本屋

が、「屋根裏の散歩者」には下宿屋が出てきます。乱歩の実人生と小説は重なっていますね。「孤島の鬼」の紀州に対するまなざしには、何か隠されていると思います。東京に対する思いにも。

細井…ずっと紀州に住んでいたら、そうでもなかったかも知れない。

佐野…何度も行ったり来たりしていますからね。お父さんを頼って大阪に行ったり、東京に戻ったり。自分の本当の故郷も浮遊している気がします。

現代への暗号

佐野…とりとめもなくなくなってしまいました。このような見方、今なお残されている暗号を解読し、未来から現在を見るという眼差しには救われます。未来予想から顧みることで、これからの生きる突破口みたいなものが隠されているように思えるんです。

細井…そうですね。「偉大なる夢」当時の危うさとは違うかもしれないけれど、同じような傾向が今もある。だからかな、乱歩作品はあまり古い感じがしないですよ。

佐野…本当に。それを思うとね、乱歩のドラマを企画した

貴島誠一郎プロデューサーの「ずっとあなたが好きだった」も後世の人たちにも見て欲しいですよ。最近、小学生から「面白かった」というファンメールをもらいました。

細井…ええ、すごい(笑)

佐野…大丈夫かなってという問題が(笑)。まあ、よしよしと、着実に育っているなって。

最後に、戦争映画と乱歩について一言。

戦時中の戦意高揚映画で「ハワイ・マレー沖海戦」(映画配給社 昭和十七(一九四二)年)というのがあるんですよ。これがね、米軍が実写のフィルムかと見紛うくらい良くてきた特撮なんです。円谷英二特撮監督の。配信動画で見れると思いますよ。

細井…そうなんです。

佐野…「ハワイ・マレー沖海戦」を観て、戦後十年の「ゴジラ」(東宝 昭和二十九(一九五四)年)を観て、昭和三十八(一九六三)年の「海底軍艦」(東宝 原作押川春浪「海底軍艦」明治三十三(一九〇〇)年)の三本を続けて観ると、近現代史がよく分かります。戦前戦中戦後、小野田寛郎さんじじやないですけど、パラレルの戦争が続いている、もう一つの世界があるような気もしてきます。恐いですが

警告として、そこには全て乱歩ありきですよ。

ということでご清聴ありがとうございました。

細井・金子…どうもありがとうございました。

入力補助 松本陸杜（中央大学大学院生）、

宇佐川奏子・村下友香（立教大学学部生）

校正・監修 丹羽みさと（立教大学）

【注】

- 1 佐野史郎（一九五五―）俳優。ドラマ「乱歩―怪しき女たち―」（一九九四年）、「闇の脅迫者―江戸川乱歩の『陰獣』より」（二〇〇一年）、映画「RAMPO」（一九九四年）、朗読「人間椅子／押絵と旅する男」（一九九七年）、テレビ番組「シリーズ深読み読書会（江戸川乱歩『孤島の鬼』」（二〇一八年）などに出演。
- 2 ハワード・フィリップス・ラザクラフト（一八九〇―一九三七）。アメリカの怪奇・幻想小説家。一連の小説は「クトゥルー神話」として体系化された。
- 3 「断崖」の他に、乱歩原作の「接吻」「人間椅子」「密室の少女」、オリジナル作品「現代篇」を所収。
- 4 若松孝二（一九三六―二〇二二 本名伊藤孝）映画監督、脚本家。「実録・連合赤軍 あさま山荘への道程」（若松プロダクション 二〇〇七年）など。
- 5 ロシアに広まっていたブルオーバータイプの上着。第二次世界大戦下では、軍服としても採用されていた。
- 6 『貼雑年譜』東京創元社 二〇〇一年
- 7 フランクリン・ルーズベルト（一八三三―一九四五）アメリカ合衆国第三十二代大統領。第二次世界大戦時に、日本への宣戦布告を行った。
- 8 香山滋（一九〇四―一九七五 本名山田^{こうじ}鉦治）映画「ゴジラ」の原作者。一九四六年雑誌『宝石』の第一回懸賞で「オラン・ペンデクの復讐」が入選。乱歩は「応募作品所感」（『宝石』一九四六年十二月号）において「プロットにも少し行きすぎの点があり、文章も必ずしもおとなではない。それにもわらず私はこの作者に大いに期待をかけてゐる」と評している。
- 9 一九四六年創刊の推理小説専門雑誌。岩谷書店のち宝石社（一九五六年以降）。一九六四年廃刊。乱歩は一九五七年八月号から、編集長を務めた。
- 10 アレクセイ・クロバトキン（一八四八―一九二五）日露戦争時のロシア満州軍総司令官。帝政ロシアの軍人。
- 11 「一列らんばん 破裂して
日露戦争 はじまった
さっさと逃げるは ロシアの兵
死んでも尽くすは 日本の兵
五万の兵を ひきつれて
六人残して 皆殺し

七月八日の 戦いは

ハルピンまでも 攻め行つて

クロバトキンの 首を取り

東郷大将 万々歳

(中略)

旋律は一八九二、三年(明治二十五、六)頃からうたわれていた『道は六百八十里』の軍歌と、ほとんど同じものである。(右田伊佐雄『手まりと手まり歌 その民俗・音楽』東方出版 一九九二年)

- 12 植木等(一九二六―二〇〇七)名古屋生まれ。コメディアン。
- 13 小津安二郎(一九〇三―一九六三)伊勢松坂の豪商、小津家の子孫に当たる。映画監督。「東京物語」(一九五三年)など
- 14 園山俊二(一九三五―一九三)島根県松江市生まれ。漫画家。「ギャートルズ」(『週刊漫画サンデー』一九六五―七五年)など
- 15 水木しげる(一九二二―二〇一五 本名武良茂)大阪市生まれ、鳥取県境港市育ち。漫画家。「ゲゲゲの鬼太郎」(『週刊少年マガジン』一九六七―一九九九年)など
- 16 小泉八雲(一八五〇―一九〇四 本名パトリック・ラフカディオ・ハーン)小説家、日本民俗学者。一八九六年日本国籍を取得。東京帝国大学文科大学の英文学講師を務める。日本の古典に取材した『怪談』一九〇四年など。
- 17 小野田寛郎(一九二二―二〇一四)フィリピンで従軍し、ルバング島で終戦を知らずに過ごす。戦後二十九年経って日本に帰還し

た元陸軍軍人。

